

HIM(診療情報管理士)とHIT(医療情報技術者) ～その現状と将来展望～

渡邊 直^{*1}, 内藤道夫^{*2}, 村田泰三^{*3}, 高橋長裕^{*4}, 中川 肇^{*5}

MEDIS-DC^{*1}, 鈴鹿医療科学大学^{*2}, 大阪大学医学部附属病院^{*3},
診療情報管理学会副理事長^{*4}, 富山大学附属病院^{*5}

【はじめに】

医療情報をハンドリングする資格として、医療情報学会認定の医療情報技師と日本病院会認定の診療情報管理士が挙げられる。前者はシステム寄り、後者は診療記録管理が中心である傾向は否めない。しかしながら、電子カルテシステムに蓄えられた膨大なデータをAIツールに成長させるためには、data controller, data managerが必要である。このミッションをこの二つの職種が担うためには、現状、どのような問題点があるか、どのように協力できるかについて、双方の学会で議論する。

【渡邊直大会長（MEDIS-DC）から】

情報処理技術に基づき医療情報を安全かつ有効に活用・提供するため、さらには保健医療福祉の質と安全の向上のために全体最適の観点から情報の適切化と利活用を総括的に推進できるための専門職が医療情報技師であることを述べていただく。その一方で、健康情報を国際標準に準拠して収集・管理、データベース化し、様々なニーズに応じた提供が出来る専門職として診療情報管理士が位置づけられること、データヘルス・サイエンスの進展に伴って役割のベクトルに大きな共通点が見えてきている今、2つの職能の将来について改めて考えてみたいとの本共同セッションの目的を述べて頂く。

【医療情報学会医療情報技師育成部会から】

長年、医療情報技師育成のリーダーとして活躍され、大阪警察病院で情報管理部を立ち上げられた経験があり、現在は、医療系大学教員としてご活躍の内藤道夫先生にご講演頂く。先生には、これらのご経験から両者に共通して求められるものは「データの利活用」だが、基本的な役割は異なっていることを話していただく。もし必要であればそれぞれの資格を前提にして、上位専門資格として「医療データサイエンティスト」のようなものの共同認定も考えられること、敢えて一つの資格に統合するよりもそれぞれの資格を残したまま、時代の要請にあわせて能力を積み上げて行くことがよいとの結論をお話し頂く。

また、臨床現場での実務経験が豊富でダブルライセンスの村田泰三先生にご講演頂く。先生は、2度のシステム更新の導入メンバに加わり、病院情報システムの円滑な運用のために尽力して来られている。また、データの二次利用業務の中心的な役割を担い、テンプレートや文書システムを活用した入力コンテンツの作成、年間800件のデータ抽出業務や各科データベースの作成を行われている。これらのご経験から、医療情報技師の役割や人材の確保や技術継承の難しさなどの課題を示して頂く。

【診療情報管理学会から】

診療情報管理学会副理事長の高橋長裕先生からは、ICD11が基本的にコンピュータベースである特徴を例に、ICD11の導入には医療情報技師との連携が極めて重要なこと、現代における診療情報管理に医療情報学全般に関する広い知識、そしてIT技術の高度なスキルが要求されることを詳細に解説される。また、当該学会で準備が進んでいる「国際診療情報管理士」の養成についても詳細を述べて頂き、あわせて、2つの職種を協働する場合の問題点をご指摘頂く。

【座長のまとめ】上級医療情報技師と診療情報管理士とが協調し、指導的立場を担える可能性があると考えられる。今後のマイルストーンとしては、これまでMEDIS-DCや医療・病院管理学会と議論を重ねてきた医療CIOの確立の議論とも関連するので、この点を含めて学会間で今後も議論を重ねることが望まれる。